

# 日本における心理学的社会学の影響

—タルドを中心に—

池田 祥 英

## はじめに

本稿では、わが国における心理学的社会学——その中でもフランスの社会学者ガブリエル・タルド——のわが国への導入とその影響について検討する。心理学的社会学の導入は、それまでのオーギュスト・コントやハーバート・スペンサーらによる社会有機体論に基盤を置いた百科全書的 sociology から専門科学としての社会学が確立されるための重要な契機となったと考えられる。この時代における心理学的社会学とは、何らかの個人の心理的過程を社会の構成要素として想定するもので、タルドのほか、「同類意識」(consciousness of kind) を社会の本質と考えたアメリカのフランクリン・H・ギディングス (Franklin Henry Giddings, 1855-1931) や、タルドと同じく「模倣」に基盤を置いた社会学を展開したエドワード・A・ロス (Edward Alsworth Ross, 1866-1951) などが有力な存在であった。そのなかでも、タルドの社会学は最も早い時期に構想されたもので、ギディングスやロスの理論形成にも大きな影響を与えてきた。そして、わが国の社会学においても、直接コレージュ・ド・フランスで講義を受講した米田庄太郎 (1873-1945) が自身の講義で取り上げたこともあり、米田や彼の教え子たちの著作においてタルドは度々登場している。たとえば米田の「純正社会学」の対象とされた「心と心の相互関係及び相互作用」(米田 1913 : 270) はタルドの精神間心理学の考え方に大きく依拠しており、また米田の一番弟子である高田保馬 (1883-1972) は、その社会学理論においてはタルドよりもゲオルク・ジンメルの影響が強いと考えられるが、『勢力論』においてタルドの著書『権力の変容』(Tarde 1909) に度々言及している (高田 [1959] 2003)。

このようなわが国におけるタルドの心理学的社会学の受容の仕方は、比較的早い段階で後継者を失った彼の祖国フランスと比べると注目に値す

る。フランス社会学史においては、ヨーロッパの外部に対する影響はほとんど考慮されておらず、タルドの好敵手であり、後にフランスだけでなく世界を代表する社会学者となったエミール・デュルケムが、彼が創刊した社会学専門の雑誌『社会学年報』への協力者集団という形で一定の勢力を形成したのに対して、没後急速に忘れられたと考えられてきた (cf. Milet 1970: 9; Lubek 1981: 376)。また、日本社会学史においても、米田とタルドの関係については、児玉幹夫や中久郎の研究において検討が行われているが (児玉 1980a; 1980b; 1981a; 1981b; 1985; 中編 1998; 中 2002)、高田とタルドの関係については、経済学者の大黒弘慈の研究があるものの (大黒 2010)、社会学説史においてはこれまであまり注目されてこなかったように思われる。

そこで本稿では、日本におけるタルド社会学の移入がどのように行われてきたのかを検討することで、わが国における心理学的社会学の影響を考えるための準備作業としたい。まずは第1節でコレージュ・ド・フランスにおけるタルドと日本人研究者との接点を探り、第2節では邦訳書刊行の状況について検討する。第3節では、米田庄太郎をはじめタルドと接点のあった社会学者の所説においてタルドの思想がどのような形で表れているのかを探ることとする。

## 1. タルドと日本人研究者との接点

### 1.1 コレージュ・ド・フランスにおけるタルドの講義

タルドは1880年代にイタリアの法医学者チェーザレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835-1909) の生来的犯罪者説に反対する論陣を張って注目され、1890年に主著となる『模倣の法則』(Tarde [1890] 1895) を刊行したことでフランスにおける有力な社会学者のひとりともみなされるようになる。しかしタルドは、その間も出身地であるフランス南西部の小都市サルラ (Sarlat) において予審判事の地位にとどまっていた。1894年になって当時の司法大臣によって司法省の司法統計局長に抜擢されてパリに異動し、その職務の傍らで政治科学自由学校 (École libre des sciences politiques) 等で教鞭を取るようになるが、それまでは学生を相手に自らの学説を説く機会が限られていた。その後1900年にコレージュ・ド・フランス (Collège de France) の近代哲学講座担当教授に選出され、そのときはじめて多くの聴衆を相手に講義する機会を得た。コレージュ・ド・フラ

ンスはソルボンヌのような一般の大学とは異なって履修登録をした正規の学生はおらず、だれでも受講できる公開講座の形式をとっている。このようなコレージュ・ド・フランスの特性は、正規の学生と師弟関係を築き上げることが難しいという点でタルドの学説の普及にマイナスの影響を与えた可能性もあるが、特別な手続きなしで受講できるという点は、外国人留学生にとっては好都合であったと言えるだろう。今回取り上げる日本人研究者がタルドの講義を聴講したのは、このコレージュ・ド・フランスにおいてであった。

それぞれの日本人研究者について検討する前に、タルドがコレージュ・ド・フランスで行った講義題目をジャン・ミレ (Milet 1970) の記述から振り返ってみる。まず1900年3月8日に開講講義を行い、同年3月から6月までは「精神間心理学」というタイトルで短期間の講義を行っているが、これは1899-1900年度の途中で就任となったためであろう。次の1900-1901年度は「経済心理学」、1901-1902年度は「道徳の変容」、1902-1903年度は「刑事哲学」(木曜)と「クールノーの哲学的諸観念」(土曜)、1903-1904年度は「精神間心理学の諸要素」であったが<sup>1)</sup>、この年度中の1904年5月に死去している。なお1904-1905年度は「会話」についての講義を行う予定でその草稿が残されている (Milet 1970: 42-51)。

## 1.2 コレージュ・ド・フランスにおける日本人研究者

日本の社会学者のなかで、タルドの講義に参加し、その影響を受けたことが最もよく知られているのは、米田庄太郎であろう。米田は1895年10月に母校である奈良英和学校の教師アイザック・ドーマン (Issac Dooman, 1857-1931) の一時帰国に同伴してアメリカにわたり、まずはコロンビア大学のギディングスのもとで社会学を学び、タルドのコレージュ・ド・フランス教授就任の報を聞いて1900年3月にフランスに渡ってタルドの講義を受講し、翌1901年12月に帰国した。『経済心理の研究』(1920)において、米田はそのいきさつについて述べている。

「千九百年にコレージュ、ツ、フランスの教授に任ぜられ、近世哲学の講座担任者として社会学を講ぜらるるや、当時所謂生物学的社会学を圧倒して勃興しつつありし心理学的社会学の方針を遵奉する欧米諸国の社会学専攻者は、続々巴里に遊学して先生の講義に参じたのである

が、余も其の一人として米国より仏国に転学し、先生の講義を聴き、又先生の声咳に接したのである」(米田 1920：7-8)。

タルドがコレージュ・ド・フランスで講義を行っていた1900年から1904年までの間にヨーロッパに留学していた日本人研究者としては、米田庄太郎のほかに、後に東京帝国大学社会学講座担当教授となる建部逯吾(1871-1945)と、京都帝国大学で初めて社会学を担当した教育学者谷本富(1866-1946)<sup>2)</sup>がおり、中久郎はこの二人もタルドのもとでともに学んだと指摘している。「[米田の京都帝国大学] 講師就任にあたり、谷本〔富〕とともに米田が在仏中タルドのもとに共に学んだ東大の建部逯吾の推挙もあったといわれる」(中編 1998：13)。

建部は社会学研究のために3年間のドイツ留学を命じられ、1898年8月に渡航、ベルリン大学、次いでパリを拠点として研究に従事し、1901年10月に帰国している(川合 1998：137)。建部の洋行記録『西遊漫筆』(1903)によれば、渡航後は直ちにベルリンに向かい、約10か月を過ごしたのち、1899年7月からドイツ各地を回って10月にパリに到着した(建部 1903：117-187)。フランスには1年以上滞在しており、教育制度に関する記述のなかにコレージュ・ド・フランスについての言及もあるが(建部 1903：268)、タルドに関する記述は見られない。その後建部は1901年3月にパリ郊外の住居を引き払い、フランス各地の視察に出た。建部は3月28日にはボルドーに到着し、デュルケムと会見している。「ボルドーは我名古屋に敵し、彼に在りても第四位の大市たり、ジロンドの入江の奥区に位し、大西洋岸に雄視する一商港たり、此地の大学にデュルケム教授あり、会見数刻、此行一着の目的を成す」(建部 1903：304)。

一方、谷本については、滝内大三の『未完の教育学者：谷本富の伝記的研究』にその足跡がまとめられている。それによれば、谷本は1899年9月に日本を出発し、11月にパリに到着している。パリからボルドー、モンペリエへと移動し、1900年12月の時点でモンペリエに滞在していることがわかる。その後、1901年4月からはドイツ、1902年1月からはイタリアに滞在して、同年12月に帰国している(滝内 2014：235-63)。このパリ滞在中に谷本はタルドの講義に出席していたことが明らかになっている(滝内 2014：252-3)。

「同氏〔＝タルド〕は御承知の通り、仏蘭西政府の警保局の事務に長く携はり、且は又彼のコレージュ、ド、フランスの教授として、其の卑見〔ママ〕を講演せられて居られた人でありまして、私も先年彼の地に留学中、数其の講義を聴き又其の指導を受けた事もございます。又話が横に外れて甚だ恐縮でござりますが、此のタルドと云ふ人は、甚だ質素な人で、終始破れ帽を戴き、破れたフロツクコートを着られて、而も背の極めて高い人でございまして、向ふから来られよるのが遙に認むる事が出来ると云ふ程の人であつて、実に親切な面白い人でございました」(谷本 1909 : 45)。

このほか、慶應義塾の初代社会学教授である田中一貞(1872-1921)もタルドの講義を受けていた。田中は慶應義塾派遣留学生として1901年5月にアメリカのイエール大学に派遣され、サムナー(William Graham Sumner, 1840-1910)らについて社会学の研究を行い、1902年5月にマスター・オブ・アーツの学位を取得した。その後フランスに渡り、主としてコレージュ・ド・フランスのタルドの講義を聴講し、さらにドイツ、スイス、イギリスにおける教育や社会事業の視察を行って1904年3月に帰国した(川合 2003 : 178)。田中は1913年5月から1914年3月まで「学校、社会事業および図書館視察」(川合 2003 : 179)のために外遊した際の視察記『世界道中かばんの塵』(田中 1915b)において、コレージュ・ド・フランスにおけるタルドの講義について回想している。

「私も此前巴りに居た時に、此仏蘭西学院〔＝コレージュ・ド・フランス〕へ講義を聴きに出掛けたものであるが、何時であつたかダールド氏〔ママ〕の講義中、見すばらしい服装をした腰のくの字に曲った一人のお婆さんがこのご教場へ入って来た。多分間違つて入って来たものだろうと思つて見て居ると、其お婆さん平然として聴講席に就き、袋の中からノートブックと鉛筆とを出して、其高尚深遠なる講義を筆記し始めた」(田中 1915b : 259)。

他にもタルドの講義に参加していた日本人研究者はいるかもしれないが、現段階で確認が取れたのはこの4名だけである。表1で示した通り、タルドがコレージュ・ド・フランスで講義を担当した1900年3月から

表1 コレージュ・ド・フランスにおけるタルドの講義と日本人研究者のフランス滞在期間

年	1899								1900								1901								1902					
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
年度	1899-1900								1900-1901								1901-1902													
講義題目*1									精神間心理学		経済心理学								道徳の変容											
日本人研究者の滞在期間									米田庄太郎*2																					
									建部遯吾*3																					
									谷本富*4																					

  

年	1902												1903												1904					
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
年度	1901-1902												1902-1903												1903-1904					
講義題目*1	道徳の変容						刑事哲学(木曜)／クルノーの哲学的諸観念(土曜)						精神間心理学の諸要素																	
日本人研究者の滞在期間													田中一貞*5																	

\*1 Millet (1970)の記述による。

\*2 中(2000)の記述による。フランスに滞在した可能性のある最大期間を示す。

\*3 建部(1903)の記述による。パリの滞在期間を示す。

\*4 滝内(2014)の記述による。パリに滞在した可能性のある最大期間を示す。

\*5 川合(2003)の記述による。フランスに滞在した可能性のある最大期間を示す。

1904年5月にかけて、建部、谷本、米田は1900年の開講後の数年で滞在期間が重なっているのに対して、田中は1902年5月から1904年3月までの間のいずれかの期間に聴講しており、他の3人とは時期が重なっていないことがわかる。

## 2. 翻訳によるタルド社会学の導入

タルドの著書はミレが略号として示しているもので15件あるが<sup>3)</sup>、そのうち20世紀中に邦訳がなされたのは、『模倣の法則』(Les Lois de l'imitation, Tarde [1890] 1895)、『社会法則』(Les Lois sociales, Tarde 1898)、『世論と群集』(L'Opinion et la foule, Tarde 1901)、『未来史の断片』(Fragment d'histoire future)の4件である。このほか、現在では『社会学試論集』(Essais et mélanges sociologiques, Tarde 1895)に掲載された長大な論文「モノダ論と社会学」(Monadologie et sociologie)の全訳が『社会法則』の新訳と合冊のうえで刊行されている(Tarde 1895 = 2008 ; 1898 = 2008)。

この15件の著作のうち、初めて翻訳されたのは『社会法則』というタルドの社会学体系の概要書であった。まず1923年1月に内田老鶴園から長岡保太郎<sup>4)</sup>による邦訳が『タルド社会法則論』というタイトルで刊行され、ついで同年8月に岩波書店から風早八十二(1899-1989)<sup>5)</sup>による邦訳が『タルドの社会学原理』というタイトルで刊行された。風早は同時に主著である『模倣の法則』の翻訳を準備していたが、同年9月の関東大震災によって被災し、原書、英訳書、翻訳原稿のすべてを失ってしまう。『模倣の法則』は翌1924年7月に『社会科学体系』シリーズの一巻として而立社(じりゅうしゃ)から刊行されたが、全8章のうち最初の6章、分量的に5分の3程度のみ抄訳となってしまう。1943年になって創元社から小林珍雄(1902-1980)による『社会法則』の新しい翻訳が刊行された。英語圏では、『社会法則』の英訳が1899年に、『模倣の法則』の英訳は1903年にそれぞれ刊行されており<sup>6)</sup>、それに比べると日本での翻訳出版はかなり遅いものであるが、タルド社会学の基本的な枠組みを扱ったこの二つの著作に対する関心が比較的長期にわたって持続していたことは注目に値する。

模倣論の応用分野についての著作としては、1928年に『世論と群集』が、赤坂静也(1902-1972)によって翻訳された(『輿論と群集』刀江書院)。本書は英語圏では1969年にテリー・クラーク(Terry Nichols Clark)による抄訳がなされただけであり(Clark ed. 1969)、同時期に稲葉三千男(1927-2002)による再訳(『世論と群集』未来社、1964年)が行われたわが国とは対照的である。それに対して、タルドの犯罪学に関する著作については、英語圏では大著『刑事哲学』(*La philosophie pénale*, 1890)が1912年に翻訳されたのに対して<sup>7)</sup>、わが国ではいずれも翻訳されていない。

SF小説の『未来史の断片』については、英訳が1905年にイギリスの有名なSF小説家H.G.ウェルズ(Herbert George Wells, 1866-1946)の序文をつけて出版され、邦訳は1925年に田辺寿利(1894-1962)の手で行われている<sup>8)</sup>。

### 3. 日本の社会学者の学説におけるタルドの影響

本節では、タルドの講義を受けていた建部遯吾、谷本富、米田庄太郎、田中一貞、そして京都帝国大学の米田のもとで社会学の学んだ高田保馬、銅直勇の所説においてタルドの学説がどのような形で表れているかを検討する。



### 3.1 建部遯吾と谷本富

建部遯吾はコントの思想と儒教思想を融合させて、社会を渾一体としてとらえ、また主著『普通社会学』（全4巻）において、彼の社会学体系のなかに「社会静学」「社会動学」という部門を設けている。したがって、建部はコントやスペンサーのような進化論と有機体論を下敷きにした立場を取ったということであり、富永健一のいう「社会学第一世代」（富永 1995）にあたると思われる。建部の書いたもののなかにタルドに関する記述を探してみると、『普通社会学第一巻：社会学序説』（1904）において、建部は「タルドは最も独創の方式に随ひて社会の理法就中心理的理法を尋繹す、而して往往牽合の弊を免れず」と述べている（建部 1904：340）。このように、建部においてはタルド社会学の影響はほとんど見られないと言ってよいだろう。

### 3.2 谷本富

谷本富は教育学者であり、本稿で対象としている日本社会学史の枠外にあるが、その著作のなかでタルドについて触れている部分を簡単に見ていくことにしよう。前節においてタルドとの接点を示すために引用した『新教育の主張と生命』（谷本 1909）において、谷本は彼の主張する「新教育」が目指す人間の進歩を、既存のものにまず順応する「適応」、困難を排除して既存のものに打ち勝つ「奮闘」、適応と奮闘の結果として得られたものをわが身に取り込む「拡張」あるいは「摂取」という三段階に分けている（谷本 1909：42-4）。そして、「他人の説を参酌した訳でもございせんが」（谷本 1909：44-5）と前置きしながらも、この三段階の進歩の見方が、タルドの考える「模倣」、「対立」、「調和」<sup>9)</sup>という三つの社会的過程に似ていることを指摘している（谷本 1909：46）。そのうえで、谷本は自らの説とタルドの主張との相違点として、タルドのいう「調和」は人々が平均化していくと想定しており、谷本の考える「拡張」や「進歩」の要素に欠けていることを挙げる。

「タルド氏の言ふ所に拠りますと、大凡人生は進歩する、進歩する結果遂に平均し均一して停止するものであると云はれる様でありますが、私は之れには賛成が出来ぬ。私は人生は拡張するものである、人生は無限に進歩するものであると云ふのでありますから、タルド氏が



如何に大家であり、如何に名説を吐かれたのであつても、私は断然之れに同意する事は出来ぬのでございます」(谷本 1909 : 46-7)。

タルドの考える社会の発展図式が、最終的に谷本の言うように「平均し均一して停止する」ものであると言えるかは疑問が残るところであろう。それはともかく、谷本自身の認識としてはタルドの説に積極的に同意していないことがわかる。その他にタルドに関係するテーマを扱ったものとして、『群衆心理の新研究』(谷本 1908)があるが、そこでもタルドの所説は大きく取り扱われているわけではない。

### 3.3 米田庄太郎

最もタルドの影響が強く見られるのは米田庄太郎である。米田の社会学の体系は、かつて拙稿において検討したように(池田 2006)、社会の實在の抽象的研究部門としての「純正社会学」(pure sociology)、具体的研究部門としての「総合社会学」(synthetic sociology)、社会の認識論的研究(方法論)としての「組織社会学」(systemative sociology)に分かれており、特に純正社会学において、社会現象の最も根本的な構成事実である「心と心の相互関係或は相互作用」(米田 1913 : 270)を扱うとしていることから、「精神間心理学」(psychologie inter-mentale)、あるいは「心間心理学」(inter-psychologie)を標榜したタルドからの影響が強く見られることがわかる。実際に米田は自らの学説に対するタルドの影響について次のように述べている。

「余の純正社会学の観念は、主としてタールド先生の思想に基づいて立てられたるものであるが、併し余は先生の思想には種々なる欠点があると考へ、之れに根本的改造を加へたる点は少なくないから、今日余の定立せる純正社会学は其の組織に於ても、亦、其の内容に於ても大いに先生の思想とは異なるものとなつて居るのである」(米田 1914 : 482)。

一方で、組織社会学の部門はタルドの社会学においては欠けているとされたものの、総合社会学部門においては、具体的な社会現象として米田が選択したテーマのなかにタルドとの関係が深いものが見られる。た

たとえば、米田の『経済心理の研究』(1920)は、タルドの『経済心理学』(*Psychologie économique*, 1902)から、米田の『現代人心理と現代文明』(1919)のなかで論じられた群衆と公衆の問題はタルドの『世論と群集』(1901)からの影響を受けていることがわかる。もっとも、その主張は必ずしもタルドの見解と同じではなく、それ以外の論者の見解も踏まえたうえで、米田独自の見解に到達していることに注意しなければならない。

### 3.4 田中一貞

田中一貞は1904年に帰国した直後に慶應義塾の初代社会学教授となった。しかし1905年から図書館長に就任するなど学内行政にも関与して多忙を極めたことや、1921年に50歳で急逝したこともあり、生前にまとまった著作は残さなかった(川合 2003)。慶應義塾での社会学の授業では「フランス流タルドの社会学で、得意のフランス語を交えて学生を煙に巻くことがあったという」(慶應義塾大学三田情報センター 1972: 59)。田中の社会学説は、「社会学上に於ける同種意識説と模倣説との比較」(田中 1909)など『三田学会雑誌』などに発表された短い論考から垣間見ることしかできないが、ここでは同じテーマについて論じられた「社会の根本的現象」(田中 1915a)と題する日本社会学院における講演から田中の主張を読み取っていくことにする。

田中はまず、社会における根本的關係として、①社会と社会との関係(グンプロヴィッチ)、②社会から個人に及ぼす関係(デュルケム)、③個人から社会に及ぼす関係(ノヴィコフ)、④個人と個人との関係(ギディングス、タルド)という四つの可能性を挙げ、そのうちで個人と個人との関係こそが社会の根本現象であると考え(田中 1915a: 457)。

それでは、ギディングスの「同類意識」とタルドの「模倣」のうち、いずれがより社会の根本的現象としてふさわしいだろうか。田中は同類意識については異質な者同士の間でも「同情」(*sympathy*)が生じることもあるので、同類であるという条件がなくても社会的関係が成り立つと指摘し(田中 1915a: 462-3)、また模倣については、欠伸の伝染のように同情を含まない模倣もありうるために、この場合は社会的関係とは言えないと主張する。したがって、同情こそが最も根本的な社会的現象であると結論づける(田中 1915a: 465-6)。

### 3.5 高田保馬

高田は京都帝国大学に入学後、米田のもとで社会学を専攻した最初の学生であり、他に社会学を選択した学生がいなかったため、米田と一対一で社会学に取り組み、ギディングスの『社会学原理』やタルドの『社会法則』をテキストとした講読の授業を受けている。高田による社会学の体系書である『社会学原理』(1919)や『社会学概論』(1922)では、社会の本質とは何か、すなわち社会を社会たらしめる最小社会事実とは何かという問題に対して、模倣を根本的な社会的事実とするタルドの主張を(そして、心的相互作用に帰するジンメル説や同類意識を根本的事実とするギディングス説、威圧や強制を持って説明しようとするデュルケム説などを)退け、「望まれたる共存」(高田 [1922] 2003: 32)こそが社会の根本的事実であると主張した。そのほか、彼の社会学と経済学の両方の分野にまたがる重要な概念としての「勢力」についても、タルドの『模倣の法則』や『権力の変容』(*Les Transformations du pouvoir*, 1899)における権力論を批判的に摂取していることがわかる(cf. 高田 [1959] 2003)。

### 3.6 銅直勇

銅直勇(1889-1979)は京都帝国大学で米田庄太郎に学び、1926年に成城高等学校教授となった後、熊本師範学校校長、横浜国立大学教授、日本大学教授、明星大学教授を歴任した(川合・竹村編 1998; 高島 2000)。銅直は1929年に刊行された『純正社会学概論』において、米田の純正社会学に似た社会学体系の構想を提起している。銅直は社会と社会現象を区別して、前者を心と心の結合とみなし、後者を結合に加えて反対や衝突、分離も含むものとみなしたうえで、社会学は(高田保馬の見解とは違い)社会現象を対象とする一般的科学でなければならないと主張する(銅直 1929: 55-9)。そして、社会学を「社会哲学、純正社会学、文化社会学」の三つの部門に分け、その性質を次のように規定している。

「社会哲学は社会及び社会現象の基礎、構成、本質、目的、意味、理想を哲学的に考究せんとするものであり、[……]文化社会学は心的相互作用をもつて中核とし、物理現象、生理現象、心理現象、及び諸種の社会的文化的諸現象が相錯綜せる結果として生成発展する具体的社会進動の系列的理法を明にせんとするものであり、[……]純正社

社会学は社会現象の根本的事実即ち心的相互関係の諸形式、およびその本質を明にし、又社会現象一般の形成連続変化が如何なる因素又は作用によつて行はるるかの諸問題、即ち社会現象一般の無制約的なる普遍妥当の理論を研究せんとするものである」(銅直 1929 : 70-1)。

銅直のいう「社会哲学」は米田のいう社会学の方法論としての「組織社会学」とはやや趣旨が異なっているように思われるが、銅直の「文化社会学」は米田のいう「総合社会学」にほぼ相当すると言ってよいだろう。先に銅直は「タルド社会学に於ける普遍化的方法論」(1927)において、タルドがあらゆる社会現象に普遍的に当てはまる事実を探究し、それを「純正社会学」(sociologie pure)と呼んでいたことを明らかにしており(銅直 [1927] 1977 : 37)、タルドから米田を経て銅直へと至る思想の連続性が見て取れる。

## おわりに

以上、不十分ではあるが、タルド社会学のわが国における広がりを見てきた。心理学的立場をとらなかつた建部遯吾や、まとまった著作を残すことなく比較的若い時期に亡くなった田中一貞については、タルド社会学を後世に伝えるという観点ではそれほど影響力を持たなかつたと考えられる。それに対して、米田庄太郎はタルド社会学から強い影響を受け、高田保馬をはじめとする次の世代の社会学者にそれを伝える上で大きな役割を果たした。もちろん、米田自身はタルドだけではなくギディングスからも直接学んでおり、またジンメルやデュルケムをはじめ同時代のさまざまな学説を取り入れて、それを教授した。そして、米田の弟子たちのなかでは、銅直勇のようにタルドの学説を比較的肯定的に受け入れる者もいたが、高田保馬のようにむしろ批判的に検討することで自らの学説を精錬しようとする者もいた。同じく米田のもとで学んだ円谷弘(1888-1949)も、『集団社会学原理』でタルドの学説を批判的に取り上げ、次のように述べている。

「タルドの心理学的社会学派はよく当初の目的を全うすることを得たであろうか。否、数物学派より生物学派へ、生物学派より心理学派への長の巡礼の結果の所産は「社会学行詰り」の衰れにも悲しき弔鐘

であつた」(円谷 1934 : 14)。

「之れまで流行はタルドによって提供された模倣の法則によつて説明され、学説としての永き生命を保持するを得たのであるけれども、其の学説の骨子たる流行を個人表象と見る点は根本的にわたくしのとる集団学説と相容れないのである」(円谷 1934 : 184-5)。

このように、米田以後の世代の社会学者にとって、タルドのような心理学的社会学は必ずしも肯定的にとらえられていたわけではないが、ともすれば国体護持のような思想と結びつきかねなかった社会有機体論から日本社会学を離脱させ、その後に来る様々な社会学理論を受け容れる基盤を作り上げるのに貢献したと言えるのではないだろうか。この点については、本稿で取り上げられたタルドだけでなく、ギディングスやロスのようなその他の心理学的社会学理論を検討し、またわが国においてそれらを積極的に取り入れようとした遠藤隆吉(1874-1946)や樋口秀雄(1875-1929)、小林郁(1881-1933)などの所説を検討しなければならないだろう。

#### 注

- 1) 米田は『経済心理の研究』において、タルドが「千九百一年より同二年に亘る学年においては経済心理学を講ぜられ」たと述べており(米田 1920 : 8)、巻末の「タルドとベルクソン」においても「(千九百年より千九百一年まで) 道徳の変遷 / (千九百一年より千九百二年) 経済心理学」(米田 1920 : 626)とミレと逆の記載になっている。この点は、タルドの『経済心理学』の序文では「1900-1901年度にコレージュ・ド・フランスで行われた講義」(Tarde 1902 : tome I, avant-propos)とあり、ミレの記述が正しいと考えられる。
- 2) 谷本富の生年月日は多くの場合、慶応3年10月17日(1867年11月12日)とされているが、滝内大三の研究において指摘されているように、谷本自身がその前年の慶應2年10月17日(1866年11月23日)に生まれたのを「わざわざ一年遅くらし」と証言しているため(滝内 2014 : 19-20)、本稿でもそれにならって1866年生まれとする。
- 3) ミレの略号リストには、1879年に刊行された詩集『短編と詩』(*Contes et poèmes*, Calmann-Lévy, 1879)から、1904年に単行本化されたSF小説『未来史の断片』まで16件示されているが、別記されている『経済心理学』の上下巻

は1件として数えると、全15件である。なお、現在単行本としてフランスで刊行されている『モノド論と社会学』(*Monadologie et sociologie*, Synthélabo, [1895] 1999)、『メーヌ・ド・ピランと心理学における進化主義』(*Maine de Biran et l'évolutionnisme en psychologie*, Synthélabo, [1875] 2000)、『性的道徳』(*La morale sexuelle*, Payot, [1907] 2008)は、いずれも雑誌や論文集に掲載された論文である。また、この略号リストに挙げられていない著書として、『サルラ地方の忘れ去られた旧砦：ラ・ロック・ド・ガジャック：考古学的研究』(*Une ancienne forteresse oubliée du Sarladais : La Roque de Gajac : étude archéologique*, Dupont, 1881)がある。

- 4) 長岡保太郎については生没年を含め詳細情報を得られなかったが、このタルドの翻訳のほか、1940年に協調会から『戦時社会政策：イギリス編』(社会政策研究資料第4輯)を出版するなどしている。なお、芳井幸子の論文「産業報国運動：その成立をめぐる」によれば、協調会とは「1919年に労使関係調整を図る目的で、政府、財界の協力の下に設立された財団法人」(芳井 1975 : 130)であり、長岡はこの協調会の常務理事として名前が挙げられている(芳井 1975 : 140)。
- 5) 風早八十二(1899-1989)は、東京帝国大学の牧野英一(1878-1970)のもとで新派刑法を学んだ刑法学者で、九州帝国大学の助教授、次いで教授となるが、マルクス主義に傾倒して治安維持法で検挙される。チェーザレ・ベッカリーア(Cesare Beccaria, 1738-1794)の『犯罪と刑罰』の翻訳で知られる(刀江書院, 1929; 風早八十二・風早二葉〔現・五十嵐二葉〕訳, 岩波書店, 1959)。タルドに関しては、『社会法則』『模倣の法則』の翻訳のほか、『国家学会雑誌』に「タルドの法律進化の社会学的研究」(風早 1923a)および「タルドの刑事社会学と刑法」(風早 1923b)を発表している。
- 6) 書誌情報は以下の通りである。*Social Laws: An Outline of Sociology*, translated by Howard C. Warren with a preface by James Mark Baldwin, MacMillan: 1899; *The Laws of Imitation*, translated from the second French edition by Elsie Clews Parsons with an introduction by Franklin Henry Giddings, Holt: 1903.
- 7) 書誌情報は以下の通りである。*Penal philosophy*, translated by Rapelje Howell with an editorial preface by Edward Lindsey and an introduction by Robert H. Gault, Little, Brown and Company: 1912.
- 8) 書誌情報は以下の通りである。*Underground Man*, translated by Cloudesley Brereton with a preface by H. G. Wells, Duckworth: 1905, 田辺寿利訳『未来史

の断片』 不及社：1925年。

- 9) タルドは『社会法則』において「反復」(répétition)、「対立」(opposition)とともに現象の三つの側面のひとつとして挙げているのは「順応」(adaptation)であるが、ここで谷本が用いている「調和」(harmonie)という語で言い換えている箇所も多い (cf. Tarde 1898 = 2008: 13)。

#### 参考文献

- Clark, T.N. ed., 1969, *Gabriel Tarde on Communication and Social Influence: Selected Papers, Edited and with an Introduction by Terry N. Clark*, Chicago; London: University of Chicago Press.
- 大黒弘慈, 2010, 「模倣・勢力・資本：高田保馬とガブリエル・タルド」『思想』(岩波書店) 1039：7-73.
- 銅直 勇, [1927] 1977, 「タルド社会学に於ける普遍化的方法論」『銅直勇著作集』めいせい出版, 35-40.
- , 1929, 『純正社会学概論』イデア書院.
- , [1964] 1977, 「米田庄太郎博士の「純正社会学」」『銅直勇著作集』めいせい出版, 55-75.
- 池田祥英, 2006, 「20世紀初頭におけるタルド社会学の受容：米田庄太郎の場合」『ソシオロジカル・ペーパーズ』15：31-47.
- 川合隆男, 2003, 『近代日本社会学の展開：学問運動としての社会学の制度化』恒星社厚生閣.
- 川合隆男・竹村英樹編, 1998, 『近代日本社会学者小伝：書誌的考察』勁草書房.
- 風早八十二, 1923a, 「タルドの法律進化の社会学的研究」『国家学会雑誌』37 (3)：99-122; 37 (4)：60-83; 37 (5)：96-119; 37 (6)：50-84; 37 (7)：115-42.
- , 1923b, 「タルドの刑事社会学と刑法」『国家学会雑誌』37 (8)：66-99.
- 児玉幹夫, 1980a, 「米田庄太郎の社会問題論」『関東学院大学人文科学研究所報』3: 23-37.
- , 1980b, 「米田庄太郎の社会意識論」『関東学院大学文学部紀要』31：49-65.
- , 1981a, 「米田庄太郎の現代社会論」『関東学院大学人文科学研究所報』4：19-38.
- , 1981b, 「米田庄太郎の文化発達論」『関東学院大学人文科学研究所



- 報』5：51-68.
- , 1985, 『社会学思想と福祉問題』学文社.
- 慶應義塾大学三田情報センター, 1972, 『慶應義塾図書館史』慶應義塾大学三田情報センター.
- Lubek, I., 1981, Histoire de psychologies sociales perdues. Le cas de Gabriel Tarde, *Revue française de sociologie*, 22 (3) : 361-95.
- 松下武志, 1999, 「米田庄太郎の社会問題論の再検討」『現代の社会病理』14 : 87-97.
- Milet, J., 1970, *Gabriel Tarde et la philosophie de l'histoire*, Vrin.
- 中 久郎, 2002, 『米田庄太郎：新総合社会学の先駆者』東信堂.
- 中 久郎編, 1998, 『米田庄太郎の社会学』いなほ書房.
- 夏刈康男, 2008, 『タルドとデュルケム：社会学者へのパルクール』学文社.
- 高島秀樹, 2000, 「銅直勇教授の社会学(1)：『純正社会学概論』を中心に」『明星大学社会学研究紀要』20: 43-57.
- , 2001, 「銅直勇教授の社会学(2)：高田保馬博士との社会・社会現象の本質に関する論争を中心に」『明星大学社会学研究紀要』21 : 37-52.
- 高田保馬, 1919, 『社会学原理』岩波書店.
- , [1922] 2003, 『社会学概論』ミネルヴァ書房.
- , [1959] 2003, 『勢力論』ミネルヴァ書房.
- 建部遯吾, 1903, 『西遊漫筆』哲学書院.
- , 1904, 『普通社会学第一卷：社会学序説』金港堂書籍.
- 滝内大三, 2014, 『未完の教育学者：谷本富の伝記的研究』晃洋書房.
- 田中一貞, 1909, 「社会学上に於ける同種意識説と模倣説との比較」『三田学会雑誌』1 (1) : 81-102.
- , 1915a, 「社会の根本現象」『日本社会学院年報』2 (3-4) : 452-66.
- , 1915b, 『世界道中かばんの塵』岸田書店.
- 谷本 富, 1908, 『群衆心理の新研究』六盟館.
- , 1909, 『新教育の主張と生命』六盟館.
- Tarde, G., [1890] 1895, *Les Lois de l'imitation: Étude sociologique*, Alcan. (=2007, 池田祥英・村澤真保呂訳『模倣の法則』河出書房新社)
- , 1898, *Les Lois sociales : Esquisse d'une sociologie*, Alcan. (=2008, 村澤真保呂・信友建志訳「社会法則」『社会法則／モナド論と社会学』河出書房新社, 5-122)

- , 1899, *Les Transformations du pouvoir*, Alcan.
- , 1902, *Psychologie économique*, 2 vols, Alcan.
- , [1895] 1999, *Monadologie et sociologie*, Les empêcheurs de penser en rond. (=2008, 村澤真保呂・信友建志訳「社会法則」『社会法則／モナド論と社会学』河出書房新社, 123-234)
- 富永健一, 1995, 『社会学講義』講談社.
- 円谷弘, 1934, 『集团社会学原理』同文館.
- 米田庄太郎, 1913, 「社会学論(一)」『日本社会学院年報』1(1-2):247-72.
- , 1914, 「社会学の観念の批判及樹立」『日本社会学院年報』1(4-5):471-520.
- , 1919, 『現代人心理と現代文明』弘文堂書房.
- , 1920, 『経済心理の研究』弘文堂書房.
- 芳井幸子, 1975, 「産業報国運動:その成立をめぐる」『一橋論叢』73(2):129-46.